

創価学会と離島広布の問題

(神道研究家) 菅田正昭

菅田正昭と申します。自己紹介ということで、私は、昭和二十年二月生まれで、早生まれですから、まあ昭和十九年組ということになります。生まれも育ちも池上です。正確にいうと僕が生まれた時にはまだ、大田区が発足してなかったのです、大森区堤方町というのが、私の出生地ということになります。現在の大田区池上五丁目です。小学校は宗務院の隣りの池上小学校ですし、中学は大森四中、それから高校は都立大森高校と、ずっとこの近場でしたので、ひよつとすると皆様方より池上に関しては詳しいかもしれないというふうに思っています。

ちやうどこの場所を下りた所の、池上小学校との境の道路になつてるところがありますね、私が小学校に上がった頃は、そこまで崖がせまっっていて、清水が湧き、沢蟹なんかが取れるような場所でした。池上小学校の現在の正門と道路の境あたりには、小学一年生の頃、なんだこの建物は、つていようなものがありました。あとから知ったのですが、それは戦前の奉安殿でした。そういえば確かにご真影が、埃をかぶっていました。その奉安殿は音楽室として、小学一、二年のころ、そこを使つてた記憶があります。現在のようになつたのは十八年でしたが、大坊の火事後です。今の宗務院の前の道路も兼ねた空間には、昔から地下タンクがありました。それまでは、どこが小学校の敷地なんだか、お寺の敷地なんだか、区の敷地なんだか区別がつかない、渾然一体となつた状態でした。

わが家は、本来は浄土真宗で、浅草の徳本寺に所属してたんですが、私の父が池上小学校と大森四中で、結構長い

間PTAの副会長をしていたのですが、そのころコンビで会長をやったのが、実は大坊の故・中野顕文さんだったんです。その絡みで、菅田さんところも長い間もう池上に住んでいるのだから、あなたもお墓があるだろうと言われて、たぶん昭和五十七年に、養源寺の檀家という形になって、今は、父親とお袋の墓は養源寺さんにあります。そういう形です。

私は、自分自身は離島問題研究者というふうには思っているんですが、離島研究では食えないので、宗教に関する物書きをやっているわけですけど、注文があるのはだいたい神道関係のものです。離島については民俗学者の研究が多く、わたしの場合も民俗学の研究から入って、そうすると民俗信仰を調べるようになる。神道はその隣り合わせのようなものだから、たまたま、神道関係の本を書けということでは今は神道研究者ということにされています。ただ僕自身は、島に関すればあらゆる宗教を対象にしたいと考えています。当然、日蓮聖人は島に流されていますから、僕の研究の視座に入ってくるわけです。海と島に関係してることなら何でもやろうということなんです。

今回、お話するのは、創価学会に関してなんですけど、僕自身は創価学会に対しては本来何とも思ってません。ただ昭和三十年頃、小学校五年生ぐらいの時ですが、不思議なことがありました。女子のクラスメイトが、何かすごいよね、みんなでこそ話合っているのです。昨日、うちに、あれが来たの、あんたたちには来なかった、すごいよね、などと何か話してるんです。何かっていうと、のちに知ったことですが、それは創価学会員が夜、来てですね、仏壇を、仏壇返しというか、仏壇をひっくり返していくっていう事件が、クラスメイトの家で、まあいっぱいあったわけです。うちは、その時点では浄土真宗ですから全然そういうことが起きずに、最初何言ってるのかなっていうふうには思っていたのですが、五十数名のクラスのうち十数名の家が学会員に襲われるというような事件がありました。ずっと後に、本の知識で、そのころ創価学会がそういう形で広布に力入れてた時期に当たる、ということを知って、僕はそういう野次馬根性的なものは好きだから、結構、感動したものです。

私は、昭和四十六年五月十日から四十九年一月三十日まで、青ヶ島村の役場職員をしていました。それから、平成二年九月二十日から平成五年の七月三十一日まで同じく、今度は助役をしてたんですが、そういう形で二回、計約六年間、青ヶ島で生活をしていました。で、今回お話するのは、最初の青ヶ島の時代です。現在も人口少ないんですが、先頃（十月末日現在）の人口が一九七名です。当時も二百名前後で、当時も現在も、全国最小村です。一番小さな村が実は東京都にあるということになりますが、実は一位三位四位ついているのは、東京都所属の村です。利島村という大島の隣にある島が約三百名、それから、今、噴火で全員避難中の三宅島のちよつと南にある御蔵島つてのが、これも約三百。二位は、愛知県北設楽郡富山村つていう山村が第二位ですが、一位三位四位が実は東京都の村であるということになります。で、私が初めて青ヶ島へ渡った当時の一年間ちよつとは、運が悪いと一カ月間ぐらい船が来ないという、非常に、遅れた島というか、だから逆に言うと、そこでの生活体験というのは、昔のことが非常によく分かるという状態でした。伊豆諸島の宗教関係のこと、とくに流人の宗教者のことも多少勉強してんですが、神道十三派に入っている禊教の井上正鐵という教祖は、三宅島に流されてるわけですけど、その人が三宅島に流されていた当時の、江戸在住の信者の方に対する手紙なんかも読みましたけれど、生活体験からとてもよく分かる。交通不便なところに住んでいたので、よく分かるというか、船が明日来るということが百分分かる時点じゃないと、なかなか手紙を書く気になれないということなんです（笑）。そういう意味では佐渡の日蓮聖人の遺文集を拝読してでもですね、非常に理解できる気がします。

本題の事件の発端というのはですね、昭和四十六年の晩秋の、ちよつと今頃ですが、旧暦の九月二十一日、その日はたしか日曜日でしたが、青ヶ島にある渡海神社、通称トカイサマに出掛けたわけです。青ヶ島では、地図に載っている、神社と名の付く所が、大里神社、東台所神社、金毘羅神社、渡海神社の四つがあります。このうち大里神社と東台所神社に関しては、明治八年十二月二十八日、足柄県から村社に指定されています。この足柄県は、伊豆諸島と、

神奈川県相模国の地域、静岡県伊豆半島の地域から成り、江戸時代の葦山代官の支配地を、足柄県という形で受け継いだもので、その村社に二つ入ったわけです。しかし、現在の青ヶ島には、法的にいうと宗教施設は一つもありません。宗教法人法における神社仏閣は一個もなく、ゼロということになりますが、でも実は神社は沢山ありますし、お寺も一つあります。何故そういうことになってしまったかというところ、青ヶ島が非常に遠く不便な所だったことから、明治初年の神仏判然・神仏分離・廃仏毀釈という流れの中で、先ほどお話した青ヶ島と同じ人口の少ない御蔵島ではですね、あそこも青ヶ島と同じく全島が本来浄土宗だったんですが、そこでも廃仏毀釈が起きまして、お寺が潰されて、祖霊社となり、先祖のお祀りはその祖霊社で行っているという島なわけです。但し、あとでまたお話ししますけれど、創価大学出身の学校の先生が、御蔵島小・中学校に着任した、その影響です、御蔵島の出身の子弟が創価大学へ入学するという形で、どうも現在は一世帯学会員のようにあります。だけど、あとは全世帯が神道というのが御蔵島です。で、青ヶ島は遠すぎて、何にも、そういう連絡が来ないという形で、足柄県から村社に一つ指定されたことも、八丈島まで調べに来た、当時の明治政府の官員がですね、どうも、可哀想だつて同情して、二つ付けてくれたというだけのことであつて、戦後もほとんど何にもなく放置されたままで、結局、本来なら宗教法人として、少なくともこの四社は指定されてもおかしくない所なのに、まあ、おそらく戦後のドサクサもあつて、通知も届かなかつたのでしよう、現在、その宗教法人という形にはなつてません。だから変な形になつてゐるんですが、青ヶ島の神社仏閣のある所は基本的には、江戸時代は名主持ちか村持ちだったわけですね。それがそのまま引き継がれてますので、現在も村有地という形になつて、厳密に言うとその、東台所神社にしても大里神社にしても、この渡海神社にしても、一応は神社であり宗教施設だと思ふんですが、土地は村が持っているという特別な形になつてます。

で、その昭和四十六年に、私は渡海神社だけは地図を見ても分からなかつた。住み始めて半年以上が経つてたんですが、他の神社にはもう数回見に行つてゐるんですけど、その渡海神社だけは、地図に書いてある場所に行つてもそ

れらしきものが全然見えなかつたんです。ないんです。それで、その日は日曜日だったんで、どうもここしか考えられないなあと思う所を捜し当てました。暖かい島なんです、若干冬枯れの様子を呈していて、竹藪の透間から鉄条網がちよつと見えて、一箇所だけ穴が開いてるような場所があつたので、そこから無理矢理に中へ入ったわけです。そうすると、空間になっている。青ヶ島の神社の場合、本土の神社とちよつと違ひまして、非常に原初的な形をして、祭祀場全体が瑞垣の玉石で覆われている、そういう空間がぽこつと出てきたわけです。おお、ここだと思つて、青ヶ島では神様詣りをする時は、イシバ（石場）の神様に対して、蠟燭をつけて、石と石との間に、お線香を差し込むという、一首の種仏習合なわけですけれど、そういうお詣りをしているってことは知つてましたんで、勝手にそれをやつてきたわけです。

そうしたら翌日、卜部をやっている廣江次平さんという方が、僕のところへ来て、昨日、渡海神社へお詣りしなかつたかと言うから、はい、お詣りしました、と答えると、島の人はもう誰も行かないけれど、行くとすれば菅田さんくらいしかいないかなと思つて来たんだよつて、言つてくれたんです。実は昨日が本当はお祭りの日だったんだけど、Iさんが学会員だから、行かれないんだよ、そのためにここ数年、お祭りもやつてないし誰れも参拝もしていないので、非常に気になつてたんだけど、ちよつと昨日がそのお祭りの、旧暦九月二十一日だったと言うわけです。自分たちがその翌日行つたら、どうも先に来て拜んでいった人がいる、そんなに神様が好きなら、じゃあ社人になりなさいということで、その仲間入りをしたわけです。

私は青ヶ島に初めて渡る前に、八丈島のことに関して書いてある本を読みました、青ヶ島には、昔ながらの神祭りが残つていて、神懸かりをする巫女がいるということが書いてありました。それで、とても興味を持ちました。私が初めて青ヶ島に行つたのは、役場職員になるためですけど、最初に泊まつた、当時は正式な民宿はなかつたんですが、その泊まつた家のおばさんに、青ヶ島には神懸かりする巫女がいるんですねつて言つたら、「そごんどうもの

はないつきゃ」——昔あつたけど今はもうないよつていうような言い方をされたんで、ほんとかな、と思つたら、そのおばさん大嘘つきでした。彼女自身がかなり優秀な、実は巫女さんだったのです（笑）。それが縁で僕は、青ヶ島の神祭りに社人として参加するようになった。それは非常に体験的な、民俗信仰との関係でした。その渡海神社の最初の出会いです。あとから判明するんですが、じつは、Iさんの家の庭の一角に渡海神社があつて、彼女の家では、渡海神社はもともと自分の家の屋敷神だというように認識していたからです。しかし、昭和三十年代に創価学会に入会したことで、その存在が嫌になり、竹藪を生やして見えないようにしていたわけです。後に分かつたんですけれど、それは、彼女のおじいさんが、大正時代か明治の終わりにですね、村に寄贈して、村有地になっていたわけで、だから彼女の家の土地ではなかつたんですけれど、Iさん自体は、自分の所の神様だから、好き勝手にできるという認識があつたわけです。そういう渡海神社でありまして、ほとんど島の人は寄りつけない状態でした。

私は昭和四十九年一月三十日に青ヶ島を離れてしまうのですが、だから二年が経つわけですが、昭和五十一年十一月二十九日の深夜にですね、青ヶ島の渡海神社のイシバが何者かによつて破壊されてしまうのです。それを壊したのはIさんと、あと二人。彼女の家が、当時民宿をやつていまして、その民宿を飯場としていた土建業者にやとわられていた千葉の人でした。たしか館山の人だったと思うんですけど、その二人もたまたま創価学会員だったもので、日常的に話をしていたらしいんですね。当時、Iさんは離婚調停中だったらしく、ここ数年、いろいろ悩んでいたようです。自分にとつていろいろなことが起きるのは、これは渡海神社が屋敷内にあるからだ、これがいけないんだ、ということで、たぶん彼女はそういうふう考えたのではないかと思うんです。ただし、当時の青ヶ島の創価学会のブロック会議は、そのことを了承（黙認？）したというふうな後から聞いています。しかし、学会員の人びとは、彼女以外はそれを否定してます。本人は、みんなの合議のもとだったのに、みんなずるいよ、と彼女自身はそういうふうに思っていたみたいです。それで、ある晩、みんなからOKしてもらつたことだし、壊して捨ててしまつたわけで

す。その壊した三人がですね、コンクリートの碑を作りまして、自分たちが渡海神社を壊した、ということ堂々と宣言したものを、神様の祠がいつぱい並んでいた場所に建てたんです。ただし、それは後にひっくり返されて、逆にそれが捨てられるということになってますけれど……。我が家にはどこか探せばその時の証写真が、あるはずなんです。でも、どうも神隠れしたまま、まだ見つかりません。

その昭和五十一年の暮れに、島の青年団の人から、壊された翌日に電話があつたのです。年末に復興させるから手伝いに来いと、いう内容でした。それで、暮れに出掛けて、捨てられた氏浦から、がちやがちやに割れた石の祠の三分の一を回収しました。だから元通りとはいえませんが、一応の復元をしたわけです。その時の、青ヶ島で起きた反応というですね、その事件の直後の十二月の初めに、八丈島の創価学会の島長が、青ヶ島にやってきて、現ナマで五十万円持つてきて、あと、百万ぐらい出してもいいから、とりあえず勘弁してくれと、お詫びを言いに来たそうです。最初は、創価学会員たちも計画を黙認していたわけですけど、なにせ名前が渡海神社ですから、神様が怒って船が来なくなったらどうすんだと、いうことで、これを島の人に言われたら学会員みんなびびっちゃって、自分たちは関係ないと、そういう謀議にも加わってないと主張したようです。でも、八丈島創価学会の島長が、内密に願いたいということがあつたようです。

ただ、島の数名は非常に怒りまして、東京の週刊誌にリークしたようです。しかし、それは結局、記事になりませんでした。何故ならなかつたかかっていうと、電話をした人は誰だか分かりませんが、たとえば菊池なにかしだと、いうふうにな乗つたとします。青ヶ島では一番多いのは菊池姓です、その次に広江です、それから奥山と佐々木が続きます。島では、僕みたいな外部の出身者でも、島で子供が産まれれば、その子供はやっぱ島の間人だから、苗字じゃなくて名前で呼ぶわけです。しかも当時、青ヶ島では、まだ電話回線は警察電話を含めて三回線しかありません。役場の公衆電話の回線を使って、外部に電話をして、菊池なにかしです、という形で用件を伝えたいと思います。

編集部では詳しい話を聞こうと、おそらく再度、電話をしたのでしよう。たぶん記者のほうは、菊池姓しか頭にならないと思うんで、誰がかけてどうなってるかさっぱりわけが分からないわけですから、当然、話が通じない。しかも事実上一回線しかないのと同じですから、なかなか話が繋がらないというようなことで、たぶんそれで記事になることなく終わってしまったんだと思うんです。

ところで、この事件のあと、実は神社の土地がIさん所有の土地ではなく、村有地であったということが判明します。だから、村有財産を破壊したと言われて、余計、創価学会員の人たちも、びびったというところがあつたと思うんです。で、その再興にあたり、その周囲に土地を持っている人が逆に、仮の名義の神社にですね、土地を寄付したので、渡海神社の社地は増えてしまったという、逆効果で終わってしまったということがあつたわけです。

実は創価学会離島本部、現在は、社会本部離島部というふうにな名前が変わっていますけれど、この事件がキツカケとなつてそれが設立されるのに絡んでくるのです。何故それが言えるかというんですね、昭和五十三年のたぶん八月だったと思うんですが、私は当時、ある美術雑誌のお手伝いをしていた時、その編集者と夜、飯田橋で飲んでいたので。潮出版がある近くでした。その潮出版近くの飲み屋で、たまたま飲んでいたら、青ヶ島ついでコトバが聞こえてきたんです、そこで、そこへ寄っていきまして、すみません、ひよつとして、青ヶ島のことについて話してませんか？ つて質ねると、そうだと言うのです。さらに、青ヶ島の渡海神社が壊された事件のことではありませんか、と念押ししたのです。すると、相手はびっくりしまして、「えっ」て言うから、私は青ヶ島に住んでいたことがある者です、と自己紹介すると、非常に安心してくれました。だから、その事件は、僕はよく知ってるし、壊した人もよく知ってる、実は壊した人は、仲間に裏切られたと思つて、すこし落ち込んでたわけですけど、僕は逆に、励まして、そのぐらいでよくよするな、やったことは悪いけれど、みんなで話し合つてやるついでいうふうに言つて、土壇場で弁解するよりあんだのほうが偉いよというふうに、僕は逆に壊した人を励ましたんです。まあ、そうい

うことを、その飲み屋の客の人に話をしたら、安心して、実は自分は、創価学会の、社会本部の団地本部っていうところに所属している者なんだけれど、今度、離島本部っていうのができるという話を、その時初めて聞いたのです。あ、そこで青ヶ島の事件がきっかけになってそういうものができるんですね、と質問すると、まあそんなところですね、こういう事件が起きるとまずいんですよ、というような話をしたことがあります。

たまたまあのうちは現在もそうなんですけれど、聖教新聞を、近所の学会員との絡みがあつて、ずっと取ってるんですが、昭和五十三年十月七日の日ですね、創価学会離島本部つてのが立ち上げられました。現在はその日が「離島の日」ということになりました。で、社会本部の中に離島本部や団地本部があつたんですけれど、本部の下に本部があるというのがおかしいということで、三年前か四年前にですね、離島本部つていう名前じゃなくて、離島部に、名前的にはまあ格下げになっていくという形になります。

で、昭和五十三年十月の離島本部が設立されてから、島々ではどうということが起きたかっていうと、「友好の集い」つていうのを、創価学会があちこちの島で始めます。以前は島々というのは、因習の巢窟だとかですね、そういうことを言ってたんですけれど、非常に、島に向かつての布教活動を活発にしていけます。そして、これが、実は一定以上の成果をあげます。で、この時代つていうのは創価学会の歴史を見ていただければ分かるんですが、停滞してた時期です。これはある意味じゃ、その目の付け所が良かったんじゃないか、と思うのです。日本の宗教つてのは、島とか海を無視する所は伸びないつていうふうに思います。

日本の靈性いうコトバがありますが、鈴木大拙は大地性だけにしか目はなく、海や島の契機が落っこつてるわけです。だから鈴木大拙なんかは、日蓮聖人のことをぼろくそに書いて、禅と浄土宗系しか日本の靈性はないつていうふうに言ってるわけですけれど、あれは間違いであつて、日本の靈性つていうのは海や島と関係がなければ駄目なわけです。ほんとうは浄土真宗の親鸞にしてもですね、浄土宗の法然にしても、実は海の靈性つていうか、そういうの

があるんですが、鈴木大拙はそのへんは全然気が付いてないということで、僕は鈴木大拙というのは、あれはちよつとやっぱりおかしいんじゃないか、というふうに思っています。

で、特に瀬戸内海に対して、非常に創価学会の布教は伸びていきます。瀬戸内海でもやっぱり、漁民が多く創価学会に入っていきます。まあ、ここでお話するのは釈迦に説法みたいなところありますけれど、日蓮聖人といったら当然、海の間人というか、自分は施陀羅が子なわけですし、島流しもされていますから、そういう意味でも、完全に海の霊性を持っているということがあるわけです。そういう意味ではやっぱり、創価学会がウララ、ウララと島を狙い打ちしたつてのは当たりです。瀬戸内海つていうところは、幕末から明治にかけての状況をみるとですね、瀬戸内海の島々つていうのは実は、被差別部落があちこちにあるんです。この人々は、江戸時代はやはり宗教的には相手にされていなかった、という状況がずっとあるわけです。そこを、幕末から明治にかけてですね、黒住教・金光教・天理教がそこをpushしていくわけです。で、そこをのちに創価学会がひっくり返していく過程で、創価学会が伸びていくわけです。もちろん現在でも、天理教や、金光教のかなり大きな教会が、瀬戸内海の島々には点在しています。でも、要所要所はかなり創価学会に浸食されていくのです。しかも、渡海船といいますか、本土と島を結ぶ船の船長とかですね、そういう人に学会員が多いのです。やっぱり日蓮の施陀羅の霊性の影響というのがかなり強いんじゃないかと思うんです。

一方で、現在は町村合併が進んでますけれど、離島の町村の首長さんがですね、国とか都道府県へ陳情に行つても、なかなか相手にしてくれない。自民党も聞いてくれないということがあったわけです。そういう中で、公明党が議席をすこしずつ伸ばしてくる過程の中で、公明党の議員がそういう離島の首長の面倒をみる、それで政治と宗教の両方が合体してですね、島に影響を持つていく、ということがあります。

で、たまたまなんです、その頃、まあ、来年三月の合併は消えてしまったんですけど、新潟県の粟島浦村とい

うのがあります。村上の沖の小さな村なのですが、ここへ私が行った時に、村長の家を夜、訪ねました。そうしたら、僕はその時点まで日蓮正宗とか、創価学会の仏壇っていうのは見たことなかったんですけど、これはちよつと違うなあと思つて、思わず聞いてしまったんです。創価学会へ入つてんですか、つて聞いたんです、そしたら、いや、私は入つてないんだ、と云うのです。でも数日前の『聖教新聞』に「粟島浦村友好の集い」という記事が載つていて、村長さんの名前も出ていましたよ、と云うと、御本尊をいただいているだけつて言うから、御本尊をいただいでたら立派な信者じゃないですか、と質問しました。自分は入つていていつもりはないと云うのです。本人にはそう帰属意識はないかも知れませんが、首長の奥さんは立派な信者である、という可能性はあるわけです。そういう形で島が視覚に入つてきます。

それと、昭和五十年代、奄美大島に南海日日新聞という、地元の日刊新聞があります。奄美は全体で人口が約七万から八万ありますので、地元の日刊新聞があり、だから当然、工場を持つているんですけど、聖教新聞が初めて、現地印刷をその時にします。これが現地印刷の第一号です。だから、大阪九州なんだ、つて言っていますけれど、そうじゃなくて、東京以外での、現地印刷の第一号は、実は奄美です。だから、昔、新進党から議員になつたお相撲さんを含めて、奄美というのは、創価学会が一定以上の勢力を持つているわけです。

で、レジュメの三番の所に入りますが、小笠原・母島の復興の原動力となつた創価学会会員たちというのがあります。昭和四十三年六月二十六日に、小笠原諸島が返還されるわけです。その前に総理大臣の佐藤栄作さんがアメリカへ行つて、ニクソンとの会談で、直後、小笠原が返つてくるという形になりますが、昭和四十三年の時点で、東京都知事は革新の美濃部亮吉だったんですね。美濃部さんは実は、小笠原村は父島だけでやつていこうと思つていたようです。で、母島はそのまんま、自然のままにさせておく、というように考えてたようです。そうした中で、昭和四十三年九月、ある事件が起きるんです。復帰の直前ぐらいから、欧米系島民（在来島民）以外の旧島民が小笠原に帰

ると、その中に、かなりの母島出身の方がいたらしいんです。この人たちが、やっぱり自分たちは母島に帰りたいたいと思うわけです。しかし、東京都は駄目だつて言うわけです。そういう中で、昔は漁民をやつていて、おそらく八丈島にいたこともあると思うんですけど、そういう人たち数十名が、東京都職員が静止する中で漁船に乗り込んで、母島へ渡つてしまうという事件が起きます。実はこれが全員、創価学会員です。その人たちは子供も連れて行っちゃつたもんで、小学校を都はつくらざるをえなくなつてしまつた。それに影響されて、続々と、創価学会の小笠原関係者が、大挙して母島へ帰るといふ行動があつたわけです。これは彼等の元々のネットワークで、実は創価学会は全く関知していなかつたらしいのですが、僕は逆に、唯一、僕が創価学会を評価できるのは、この母島の学会員たちが、東京都が駄目だつて言つてるところを無理矢理に島へ帰つたことをすごく高く評価しているのです。このことは創価学会たちよ、もつと威張つて発信してもいいことだつていうふうを考えているのです。そのために、東京都は追認する形で小学校や中学校を建設したりして、現在は約四百五十人が住んでいます。たぶん母島の人口の三分の一は学会員ではないでしょうか。

小笠原村では、六月二十六日の小笠原返還の日を、村主催でお祭をやつてゐるんです。ところが母島では、毎年やつてます。その毎年やつてゐる母島の、小笠原返還の日、公明党の都議会議員が来て、島内のマラソン大会があるのですけれど、その号砲を撃ちにやつて来ます。それがずっと、三十年近くやつてゐるわけです。で、それに対しては、誰も不思議に思わないぐらい、母島では、創価学会・公明党が影響力を持つてゐるわけです。

ただ、小笠原は返還と共に小笠原村が設立されたわけですけど、実は、しばらくの間、東京都の直轄地で、村長は東京都小笠原支庁長が兼務するという形で、議員もいませんでした。都知事任命の職務執行代理者が、村長をやつてゐるという形が長く続いたんですが、初めての選挙の時は定数八名の中で二人の学会員つていうか、公明党の候補が立ち、二人とも上位で当選しました。で、二度目の選挙の時には、母島の非学会員がトップ当選しました。その人の

公約は、母島にある、戦前あつた神社を復活させて、是非お祭りを復活して、みんなでお御輿を担ぎたい——ただそれだけの公約で、見事トップ当選をしたということがあつて、創価学会の連中は非常にショックを受けたようなんです（笑）。そういう事件があつて、但し、一回だけしかその神通力は効かなかつたようですけれど、母島で石を投げれば学会員に当たるといふ状況の中で、小笠原全体でトップ当選したのは大きな出来事でした。

今日の、この資料の中の二枚目にですね、これは私が助役をやっている時に、当時の創価学会青年部長の正木正明氏に出した公文書のコピーです。平成三年十一月十一日付で出しています。当時ちょうどあの創価学会は、宗門との戦いがちょうど勃発した頃ですね。まだ、正式には除名もまだ、されてない時でした。当時、私は青ヶ島村助役をやつてたわけですけど、学校の先生で学会員の人と、個人的にちよつと親しかつたんで、創価新報も取つてくれないか、と言われて購読していました。まあ、あれは週刊の新聞ですが、いつも日顕さんの悪口が出てくるというような状況の時にですね、青ヶ島から、役員職員と教員が伊豆七島池田兄弟会に出掛けて、その参加者の写真が『聖教新聞』に載つたわけです。それを見て、僕はそれまで知らなかつたんですけど、創価学会では、伊豆七島という言葉を使つてゐるつていうことを、初めて知つたわけです。私は、青ヶ島村役場の助役という立場からいふと、伊豆諸島という言葉を使つてもらいたい、伊豆七島という言葉は使ってもらいたくなかつたわけです。私にとって伊豆七島つていふのは、青ヶ島に対する許し難い差別用語であるといふふうには、今も認識しております。昔はそう思つて、最近はその過激に動いていませんけれど、新聞社やテレビ局が、伊豆七島という言葉を使うと、すぐ抗議電話を入れていたのです。で、それが功を奏しまして、NHKは絶対使わなくなつたですね。民間放送はときたま間違つて伊豆七島を使う奴等がいるんですが、いちおう使用しないわけです。何故、伊豆七島というのがいけないかといふと、伊豆諸島は十島で成つてゐるわけです。その中から式根島と八丈小島と青ヶ島が伊豆七島には入つてないわけです。八丈小島つていふのは、昭和四十四年に無人島になつてしまうのです。それも元を正せばやっぱり、伊豆七島に入つてな

かつたために無人島化したということが言えるわけです。

で、私が非常に強調したいのは、実は、青ヶ島は、昭和三十一年七月八日の参議院選挙の日まで、選挙権を奪われていたことです。国政選挙権を奪われていたのです。信じられないかも知れませんが、公職選挙法施行令という法律より下の施行令の第四百七十七条に、「東京都八丈支庁管内青ヶ島村においては、衆議院議員、参議院議員、東京都の議会の議員若しくは長又は教育委員会の委員の選挙は当分の間、これを行わない」という条文がありまして、そのために選挙権を奪われていたのです。憲法では二十歳以上の日本国民は、選挙権を持つているのに、ですね。つまり、正当に選挙された国会における代表者を選ぶことができない青ヶ島の人びとは、日本国民ではない、ということなのです。

実は、よく、忘れられているのですが、沖縄は、昭和四十七年五月十五日に返還されるわけですね。その前の、先程申しましたように昭和四十三年六月二十六日に、小笠原が返還されます。で、奄美群島が昭和二十八年十二月二十五日に返還される。その二年前、実は、トカラの鹿児島県十島村が昭和二十六年十二月五日に、返還されているわけです。

実は伊豆諸島も、昭和二十一年一月二十九日に、日本からの行政分離があつて、それで小笠原や沖縄や奄美やトカラと同じく、日本から行政分離されます。伊豆諸島は三月二十二日に復帰しますので、五十三日間でしたけれど、日本じゃなくなつたんです。これは、みんなが知らない事実です。教科書にも載ってません。で、右も左もみんな、それを抜かしています。で、腹立たしいのは、日本共産党が天皇を置いてない憲法は自分たちしか作らなかつたと自我自賛し、社会党の憲法私案も天皇が入つてたし、自分たちが一番民主的だと抜かしておりますけれど、実は、伊豆大島においては、大島憲章という、自分たちは独立しようということ、独自の憲法草案ができた。当然、大島だけ独立するからそういうことになるんですけど、天皇の規定はないわけです。共産党も左翼系の憲法学者もそういうこと

は全部無視しております。

伊豆諸島は五十三日間でしたけれど、青ヶ島に関しては、昭和三十一年七月まで日本じゃなかったということで、トカラや奄美より遅く、青ヶ島は昭和三十一年によく本土復帰できた、というふうに僕は認識しております。で、昭和二十九年頃にですね、実は、朝日新聞の記者が、青ヶ島に選挙権がないということに気が付いたわけです。そこで、東京二区選出の衆議院議員、それから、東京都選出の参議院議員、伊豆七島選出の都議会議員、彼らに電話をしたようです。お宅の選挙区の青ヶ島で、って言ったら、ああ、青ヶ島はうちは選挙区ではありません。青ヶ島は伊豆七島じゃありません、というふうに言われて、電話を切られたそうです。つまり、伊豆七島という概念語は差別性を持っていたわけです。

そういうことで、そういう差別的な名前を、何故、民衆だ平和だと言っている創価学会が付けてるのか、それが気に入らないよと、いう形で、実は出したわけです。で青ヶ島の、当時僕の下にいた総務課長補佐がですね、「助役さん、これまずいつすよ、これはなんか利敵行為、創価学会が喜ぶんじゃないですか」と鋭く看破しました。当然、僕はすぐ、正木氏から詫び状が来て、学会は伊豆諸島に変更するだろうと思っただけです。そうすれば、まあそのこと、東京都へ出張したとき都庁の記者クラブで青ヶ島の助役として発表してもいいなと思っただけです。そうすれば、それは確かに、創価学会にとっては、逆に得になることであって、不利にはならなかったはずなんです。

ところが、ずーっと、その書類は眠ってました。それで、平成十年になって、私は、なんとなく寝覚めが悪くて、未だに返事がないっていうのは絶対許せないなと思って、実は、昔こういうのを出したことがあるのですと、そのときのコピーを秋谷会長宛に郵送しました。そして、そのことを知人のH氏に伝えました。そのH氏が創価学会の広報室へ、近々、菅田という人物から秋谷会長宛の手紙が送られるから、と連絡してくれたようです。

そうしたら、結論的には、創価学会の広報室から、平成三年に出した公文書を六年半も放置して誠に申し訳なかつ

たという形で、伊豆七島という語は今後もう使いませんという返事をいただいたわけですが、で、後から関係者から事情を聞くと、私が出したその公文書に対してですね、正木氏はびっくりして、それを持って離島本部へ駆け込んで相談したらしいです。そして離島本部のほうもびっくりして、それは正木さんのほうで処理すべき、と突き返したらいいんです。それをね、二度か三度やつてる間に紛失してしまつたようです。紛失したら、ああ申し訳なかつた、もう一度送つて下さい、とか言えればいいのだろうと思うのですが、官僚主義だから、彼等は責任をとらず放置してしまつたわけです。

それで僕が秋谷会長に出したもんだから、あわててしまつたようです。私が平成十年の二月頃に秋谷会長に出した時に、実はそれを開封したのが、因縁というか、再び正木氏だつたんです。正木氏は当時、会長秘書室長で、秋谷会長宛ての私の手紙を自分の机の中に、またしまい込んだ。日氏から連絡を受けた某氏が正木氏の机の内から手紙を捜し出し、それを持って秋谷会長の部屋へ飛び込んで、秋谷氏に見せたところ、秋谷会長はその場で、要望書の通りにしなさい、と即決したそうです。

正木氏は創価学会の副会長で、それもかなり上位の副会長のようです。しかも、総東京長という高位の役職にあり、池田大作氏の長男が次期会長になると、その懐刀になるだろうと言われていました。しかし、その本質は単なる官僚であり、間もなくその本性を露呈させます。

当然、僕は伊豆七島池田兄弟会が伊豆諸島池田兄弟会へ変わった、というように思っていたわけですが、その証拠にですね、この手紙の返事が来たのが平成十年三月二十四日ですが、三月の終わりだったか四月の始めだったか、伊豆七島栄光圏が、突然、名前を伊豆諸島という形で、確かに名称も変わったわけですが、私は伊豆七島池田兄弟会も名称が当然変わつてるといふふうにしてたら、その年の九月ですか十月頃、創価学会員から私のところにタレコミがありました。「菅田さん、変わつてませんよ。自分も、伊豆七島はいけないことだと思います。ところが変わつて

ないです」という内容の電話でした。何故変わってないのか大体、見当が付くけれど、正木氏がたぶん、あの七つの鐘だとか、南無妙法蓮華經の七字と、伊豆七島をくつつけてね（会場笑）、そういう馬鹿な教義を打ち出して、変える必要はない、と言ってるんだらうと私が言うと、「菅田さん、どこで聞いたのですか、その通りでございます」つて言うから、そんなことは検討が付くよ、彼らの論理構造と教義の理解度からいくと、そのくらいのことはすぐこつちだつて見当付くよ、と答えると「もうその通りでございます」というわけですよ。

それで僕は頭に來ましてね、これはもう許せないぞ、と。すぐ広報室に電話したんですよ。すぐ変えてくれない限りは、今度はこのことを公表するから、と抗議をしたら、「いやあ、すみません。少し待って下さい。今度は絶対、首根っこを掴んでも伊豆七島はやめさせますから」とのことでした。その翌年、伊豆七島池田兄弟会が伊豆諸島池田兄弟会へ変わつてる記事が『聖教新聞』に出てたんです。そういった形で、最後まで現・創価学会副会長兼総東京長の正木氏は官僚主義的に抵抗するわけです。

ところで、離島振興法が昭和二十八年に施行されます。できたんですが、その離島振興法五十周年の時に理念を含めて大幅な改正をしました。今まで離島関係の法律も、実は自民党の政務調査会の中に離党部会というのがありますが、そこが実際に中心になってまとめてきたわけです。離島振興法は制定から十年置きに時限立法で改正してきたわけです。離島振興法五十周年は平成十五年ですが、その前の平成十三年に、改正のため各党に協力してもらったわけです。とくに、公明党は与党になつてから、公明党の政務調査会にも協力してもらいたいということで、日本離島センターから私に、離島に理解のある公明党の幹部を知らないかと打診がありました。いったんは知らないと答えたのですが、そのとき、突然、思い出したのが、昔、小笠原へ何度か出掛けていたのですが、その時に、号砲を撃ちに行つた都議會議員のお供についてきた公明党の東京都委員会の職員を思い出して、この人の名刺がたぶんあつたなど思つて家中を捜索したら出てきたわけです。で、彼に電話をしたら、そういう話だったら、都議会じゃなくて、

公明党本部のほうの政調がいい、実は自分の同僚で、都議会のときは自分の隣の席に座っていた人が事務局長ということで、その人に会いました。まあ僕はその後は、下りちゃったんですが、ルートが繋がったんです。で、公明党の政務調査会に、離島振興小委員会というのが設立されます。そういう形で、公明党さんにも離島振興法五十周年の五回目の改正の時には、尽力してもらったという経過があります。

で、今年（平成十六年）の二月にですね、皆さんもご存知でしょうけど、ヤフーBBの顧客情報流出事件というのがありました。この中で、宮本日共委員長の家を盗聴した実行部隊だったというT氏の名前が出てくるわけです。この人が実は、離島人脈の要にいた人なんです。で、資料の三枚目ですが、V氏お誕生パーティーお知らせの中の幹事で、SSTのT氏の名前が見えます。で、このV氏という人は青ヶ島出身の実業家です。二部上場企業を中心とする企業グループの総帥です。その誕生祝いの幹事にT氏が中心になって、毎年パーティーを開いた。そのパーティーに行くと、野中弘務とか、与野党の政治家がたくさんいるという集まりでした。じつは、V氏のお父さんが、私の最初の青ヶ島時代の村長です。その絡みで、僕も呼ばれたわけですけど、二度目からは行く気がなくなって、実は、行かなかった時期があるわけです。で、一昨年ですか、またTさんからFAXが入って、そのときT氏というのはどっかで聞いたことがあるぞ、というように思い出して、ヤフーで検索してみました。そしたら、宮本顕治日本共産党委員長宅盗聴事件っていうのがばーんと出て来たんで、あのT氏か、というように思ったわけです。

それと同時にですが、私が助役に就任をする、たぶん数ヶ月前にですね、青ヶ島の金比羅神社に、創価学会の幹部だと言われている人が、お詣りしてるんです。その時はV氏所有のヘリコプターに乗ってやってきたんですが、その創価学会員が金比羅さまの前で、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と唱えながら参拝したっていうふう聞いたんで、僕はそれはなかなかいいことだぞ、偉いと思ったのです。そういう学会員には会ってみたいというふうに思っていたのです。ひよつとすると、その人がT氏かな、と思って、そのT氏のところへ電話したんです。そうしたら、「菅田

さん、誠にその通りでございます」と。それなら顔だけ見に一度出てみよう、ということでも出たわけです。それが一昨年だった。そうしたら彼が非常に島好きの人間だったんで、じゃあ、創価学会抜きにして、島ということで付き合おうよということで、今年二月にぼくの友人を交えて永田町のうなぎ屋で三人で飯を食いました。その一週間後に、彼は逮捕されたんです。でまあ、彼だけ処分保留という形で、すぐ釈放されるのです。その後、週刊誌に色々書かれているわけですけど、その中で一昨年、竹岡氏と一緒に公明党の参議院議員がブラジルへ行っているわけです。彼の名前は福本潤一氏といいます。この人は、今年、国民年金の未納議員として報道されました。福本議員は、広島県の出身で昭和二十四年生まれ。広島修道高校を出たあと、東大の農学部へ入学し、その後大学院も出て、農学博士になって、愛媛大学助教授をやったわけです。愛媛といえば、当然、瀬戸内海の離島県の一つです。その絡みで、愛媛大学の農学部の助教授だったもんですから、かなり色々な島の調査をしたようです。その関係があつて政界入りしたあと、公明党政務調査会離島振興対策小委員会委員長という役職になって、島のことをやってたわけです。

その福本潤一氏と高校時代、文字どおり席を並べていたのが、実はT氏なんです。T氏は、自分は福本さんより頭は良くないから、と言いなながら、中央大学の法学部法律学科へ入学しています。なにせ私が受けて落っこった大学ですから（笑）、そこそこ頭は良かったと思うんです。高校時代からのずっと友人で、しかも創価学会員同士ということで、二人はとても仲が良かったようです。その両方のことで、まあ、車の車輪みたいな形です。ね、離島業界周辺に二人が結構出てる。福本潤一氏はそのため、国土審議会の離島振興対策部会の委員をやってます、ただし、去年変わった、公明党の有名な浜四津参議院議員が、福本潤一氏のあとの委員をやってますけれど、そういう離島人脈つてのがある。

しかもその福本潤一氏の政策秘書は馬田泰弘氏という人なんです、この人は長崎県北松浦郡小値賀町斑島の出身

です、まさに島の出身で、しかも元々は自民党の代議士の議員秘書だったのですが、創価学会員だったために移ってきたという異色の経歴で、いうならば、離島政治のエキスパートともいうべき人です。T氏に關係する形で、ヤフーBB事件まで絡んで、創価学会・公明党は微妙に青ヶ島と關係があるといえるわけです。

僕自身はこのT氏に関しては、まあ、引っかけられたんだ、というように思っています。一緒に食事をした時に、その時点で共犯だと言われてた二人は、もう逮捕されてたのに、彼は全然そういうことも知らず、その日もですね、自民党本部に彼自身が用があつて出掛けて、その帰りに会つたわけです。ところで、T氏の会社は報道によると、ヤフーBBの総代理店ということですが、ヤフーと島との關係があります。昨年なたしか夏の初めに、ヤフーBBつていうかソフトバンクの孫さんが八丈島へ出掛けているのです。実は八丈島が、昨年の時点で町でブロードバンド化したいという話を、出したわけです。で、当然、その話を最初にNTTに持ち込んだようです。ところが、その時点では十億かかるので、八丈島にそんなものは投資できないと答えたそうです。ただ、八丈が自分たちで、その金を出せば、ADSL化を考えてもいいと回答したそうなんです。それで八丈町役場や、町長を始め、なんだNTTはやってくれないのか、と怒つたわけです。そういう中で、八丈島の青年が独自に、八丈島ブロードバンド研究会というのを立ち上げて、島の青年たちで、ADSL化をやるうということ運動を始めたわけです。

その中には実はいろんな人がいたのですが、ただ、その一番中心になった人が実は創価学会員で、都立八丈高校の理科の教諭です。その人の自称一番弟子の人が、高校を卒業してNTTへ入るのです。しかし、自分とこの会社がやってくれないので、ソフトバンクの孫さんに直接メールを出したら届いて、八丈島へ一度行って、皆さんのお話を伺いたいということになるのです。孫さんが八丈島へ行って、ティーチンをやると、その中で、彼は、うちがやりますと明言するわけです。実はその時に、公明党のプリンスといわれている若き参議院議員の遠山清彦氏が同行するので。その二人がティーチンと一緒に話をして、おそらく帰りにですね、人口三千人以上の島は採算が合うん

だということを経験さんが言って、人口三千人以上規模の島は全部ヤフーBBでやりましょう、いうことを言い出したようです。そういうことで、離島の人脉を通じて、その話を国土交通省へ持っていく。とりあえずはその東京が中心だからということで、都庁へ持っていく。当時はまだ都知事の息子が国土交通省の大臣でしたから、そういう形で、急速に話が進んでいったようです。で、全国の三千人以上規模はヤフーBBがやるという形がほぼ確定した中で、昨年（平成十五年）の十二月の終わりになってですね、新藤NTT会長がですね、俺はそういう話を聞いてなかったと、全然知らなかったと、いうことで急に怒りだしてですね、八丈はNTTでやる、ヤフーなんかにはやらせないというふうに、社内で発言したらしいんです。それで、しかもNTTは、ADSLじゃなくて光ファイバーでやると。そのオープンに関しては、一銭も八丈島に金をかけさせない、独自にNTTでやるというふうに言い出した。もちろん、そのこと自体は、大いに歓迎すべきことです。

それで、今年の一月になってからですね、NTT東京から八丈島に十数人の営業部隊が送られてくるわけです。で、そういう中で、実はもう昨年の時点で、八丈町はヤフーBBでいくという方針が決まっていたのに、各家にNTTの社員が行ってですね、パソコンも持ってないお年寄りの家に行きまして仮契約をするという、とんでもないことをやり始めて、それで島の青年たちが怒って、NTTはとんでもない、許せないぞと言いだした。その事件が今年一月の終わりだったですね。それで僕はなんか事件が起きるんじゃないかと、ヤフーBB関係で、と思ったのです。

そこに起きたのがちょうどTさんの事件だったんで、何か絡みがあるんじゃないかなあ、と思ってるわけです。だから、実は、総務省と国土交通省との間の縄張り競いが背景にあるんじゃないかというふうに思ってるんです。総務省というのはご存知のように、戦前で言えば内務省と今日の情報関係を全部握ってる所ですし、国土交通省のほうは、巨額投資に関することはほんとうに一手にやってる。たぶん、その両方の官僚のですね、はざまにその連中はみんな落っこっちゃった、んじゃないかなというふうに個人的には思ってるんです。そういう、事件が裏にありまし

た。まあ、島と、広い意味での日蓮聖人つてのは、何か関係あると思って、とりあえずの話は終わらせていただきます。